

【第七八回研究例会】

中近東・韓国・日本における子どもに手渡す物語

中東における子どもの本の世界

— サウジアラビアを中心に —

片桐 早織

はじめに

現在、さまざまな問題を抱える中東地域は、古代から続く長い歴史をもち、かつては多くの人と文物が行き交う文化的先進地だった。またイスラーム圏である中東には、イスラームに関する物語が数多く伝えられてきた。豊かな口承文芸にも恵まれ、それは絵本をはじめ、様々な形で子どもたちに伝えられている。その一方で近代における紛争と国造りの歩みの中から、それぞれの国情を反映した絵本も出版されてきた。この稿では中東における子どもの本について、特にサウジアラビアを例に挙げ、どのような絵本が子どもたちに手渡されているのかを論じたい。

中東のあらまし

中東とは西アジアとアフリカ北東部の地域の総称であり、具体的にはイラン、イラク、シリア、パレスチナ、アラブ首長国連邦、サウジアラビア、トルコ、イスラエル、イエメン、エジ

プトなどが含まれる。難民問題やパレスチナ問題、内戦、民族紛争など様々な問題を抱える国も少なくない。近世以降から現代にかけてのこれらの国々の状況は、国によって大きく異なるが、イスラエルを除く殆どの国において人口の大半をムスリムが占め、歴史的、文化的にも多くの共通する部分をもっている。

歴史的には古代オリエント世界の知的遺産を受け継ぎ、中国やインドの文化的影響も受け、広大な領域に豊かで融合的な文化が栄えた。またギリシア語文献の活発な翻訳活動は、結果的にヨーロッパにルネッサンスを促した。科学では「イスラーム科学」または「アラビア科学」と呼ばれる発達した科学を生み出し、現代の科学技術の基礎を築いた。例えばアルカリ、ギプス、マツサイジなど多くの科学用語、医学用語はアラビア語を語源としている。また非常に商業的な要素をもつイスラームの教義と共通語としてのアラビア語、およびムスリムが一堂に会する巡礼は、都市間を結ぶ活発な物流と交易活動、そしてそれを支える広範でダイナミックなネットワークを生み出した。

中東の口承文芸

このネットワークはまた、豊かな口承文芸をもたらし、中東の各地では、狡猾な禿の男、果物の中から現れる美女、狼に挑む母山羊の話など、非常によく似た物語が少なからず見られるが、これはこの広範な交流によるところが大きいと思われる。

中東の口承文芸には、家族や隣人間で語られる、いわば家庭

での語りと専門の語り手による商業的な語りがある。中東では家族の繋がりが非常に強く、また近所づきあいが濃厚である。エジプト人、シリア人、サウジアラビア人、イラク人、スーダン人などの二十代から六十代の男性十一人、女性十六人に聞き取りをしたところ、殆どの人が物語を子どもの頃に家族（祖母、母、姉、叔母、父など）や近所の人から聞いていた。物語の内容は預言者伝などの宗教的な話から、教訓的な話、世界的に広く知られた童話、『ジュハー』や『千夜一夜』などの中東の民話、かつて近所で起きた出来事を元にした世間話など多義にわたっていた。殆どの回答者が聞いた話の内容をよく覚えており、中には物語を巧みに再現する人もいたことから、中東では今も家庭での語りは健在であることが窺がえる。例えばあるサウジアラビア人女性（マダーイン・サーレハ在住、二〇二〇年当時、三十五歳）は、幼い頃に聴いたというラクダの話を、イラクのカルバラで出会った五十代の女性（二〇一五年当時）は『千夜一夜』の冒頭部を、そしてバグダード在住のシリア人女性（二〇一九年当時、三十歳）は、母から聴いたという『レイラ・ワツ・ズイブ』（レイラと狼・赤ずきん）を、語り出しから語り納めの決まり言葉に至るまで流麗に語ってくれた。

また公衆浴場（ハمام、ハンマーム）は、古くから男女双方の社交と情報交換の場であった。『千夜一夜』やトルコの『ケローラン』の物語には、「公衆浴場で物語を集める」という場面があるが、実際に公衆浴場では様々な語りが行われたと思われる

る。公衆浴場は現在も楽しい語らいの場であり、中で軽食を摂りながらお喋りに興じている姿を見ることができるともいえる。またマクハーやチャイハネと呼ばれる喫茶店は男性の社交場であり、そこでは『アブー・ザイド武勇伝』、『バイバルス武勇伝』、『アンタラとアブラ』、『レイラとマジヌーン』、『千夜一夜』、『シャー・ナーメ』などの様々な物語が専門の語り手によって語られていたという。

これらの口承文芸の多くは、絵本はもちろん、ドラマやアニメーションという媒体を通して現代の子どもたちに伝えられている。例えばトルコでは、草原を舞台とした英雄物語集の『デデ・コルクト』、上述の『ケローラン』、『トルコの一体さん』とも言える『ナスレットイン・ホジャのお話』。アラブではナスレットイン・ホジャとほぼ同一視される『ジュハー（エジプト風にはゴハ）のお話』、『千夜一夜』、アラビア文学最古の散文であり、インドの寓話集『パンチャタントラ』を元とした『カリラとディムナ』。



『カリラとディムナ』2011

كليلة و دمنة، نبيهة محبلي، ابن المتفح،
محمد سعيد بعلبكي، دار الحدائق

イランでは『射手のアーラーシユ』などの神話や伝説、イラン最大の民族叙事詩『シャー・ナーメ』、そしてペルシア語文学史上最大の神秘主義詩人であり、トルコのメヴレヴィー教団の祖であるモウラーナー（ジャラル・ウッディーン・ルーミー）の『精神的マスナヴィー』の寓話などである。

これらの物語は、中東世界およびイスラーム圏という共通の枠組みのなかで、アラビア語、トルコ語、ペルシア語の枠を超えて広く中東の子どもたちに伝えられているものも少なくない。特に『精神的マスナヴィー』の寓話はインド発祥の寓話や他の文献の物語を多々含んでおり、その多くが絵本化されている。また『ホジャドンのしつぺがえし』・トルコの民話（ギンセンリ・オズギユル再話・絵 ながたまちこ訳 一九八三 ほるぷ出版）や『2ひきのジャッカル』・イランにつたわるおはなし』（愛甲恵子再話 アリレザ・ゴルドゥズイアン絵 二〇二一 玉川大学出版部）、『くらやみのゾウ』・ペルシアのふるい詩から』（ミナ・ジャバアービン再話 ユージン・イエルチン絵 山口文生訳 二〇一八 評論社）などのように、日本の子どもたちに伝えられているものもある。

アラブの絵本

次にアラブ圏で出版されている絵本について述べたい。アラブ圏では、英語の絵本、また英語やフランス語などのバイリンガル絵本も出版されているが、ここではアラビア語のみで出

版された絵本について触れる。

川真田純子氏はその著書『アラビア物語1（みどりの文庫）』のなかで、次のように述べている。「みどりの文庫についてですが、これはアラビアの子どもたちが、大人になるまでに、一度は手にする物語集です。（中略）アラビアのこどもたちのあいだでは、とても人気のあるみどり色の表紙の本です。」

この「みどりの文庫」とは、エジプトの Dar al-Ma'arif 社出版の al-Maktabah al-Khadra' lil-Atfal（子どものためのグリーンライブラリー）のシリーズを指していると思われる。これは非常に人気のあるシリーズで、版を重ねてアラブ圏の各地で流通した。実はイスラーム圏を含む世界各国の民話や童話のアラビア語訳で、アンデルセン童話をはじめ『シンデレラ』や『不思議の国のアリス』などの世界の名作がシリーズの多数を占めている。翻訳絵本に関しては、イギリスの William Heyworth 社出版の人気絵本シリーズ Ladybird Books などもアラビア語版が出版されていた。

アラブ圏の絵本の大きな転機は、パレスチナ問題によってもたらされた。一九四八年の第一次中東戦争以降、約七十万人のパレスチナ人が難民となり、その子どもたちがパレスチナ人としての教育を受けられなくなった。この事態を憂慮した当時の PLO（パレスチナ解放機構）は様々な方面に呼びかけ、青少年のための出版社、Dar al-Fatah al-Arabi（アラブの若者社）を立ち上げ、一九七〇年代初めから児童書を出版し始めた。これは

当時のアラブ世界で唯一の児童・青少年出版社であり、児童書が殆どなかったアラブ世界で人気を博した。このような経緯で生まれたためか、この出版社の絵本にはパレスチナ人としての自覚を促す内容や、戦意を高揚させるような内容が少なからず見受けられる。だがアラブ世界のニーズに合った質の高い絵本が、アラブの作家とアーティストの手によって初めて数多く出版されたことは特筆するに値する。この出版社はもはや存在しないが、エジプトのアンデルセン賞ノミネート挿絵画家ヘルミー・エル・トウニーのように、アラブ世界で活躍している現在の絵本作家たちの多くが、かつてはこの出版社に関わっていたことから、その影響力の大きさが伺える。

フセイン政権下のイラクでも大きな転機があった。当時のイラクは石油収入で得た莫大な資金を芸術活動や出版活動に投じたため、イラクはアラブの世界において先駆的存在となった。フセインの意向による、イラク文化教育省を主体とした出版社 Maktabat al-ith (子ども出版社) が設立され、七〇年代終わりから八八年にかけて、創作、翻訳を含め印刷、質、共に大変に優れた子どもの本が数多く出版され、非常な安価でアラブ諸国に配布された。現在活躍しているアラブの若手絵本作家のなかには、子どもの頃にこの出版社の本を見て育った者も少なくない。

そして現在、アラブ圏では更に優れた絵本が数多く出版されている。世界で最も高額な文学賞のひとつとして知られる、アラブ首長国連邦のイッティサーラト児童文学賞も、絵本の発

展に拍車をかけているようだ。この賞の受賞者の国籍は様々である。アラビア語の口語(アーンミーヤ)は国や地域によって異なるが、文語(フスハー)はイスラーム圏共通である。絵本も原則としてフスハーで書かれるため、アラビア語の絵本には国境が存在しない。アラブの絵本作家は国境を越えて活動し、絵本の挿絵画家もアラブ人のみならずイラン人、欧米人など様々であり、それらの優れた作品は数々の賞を受賞している。

アラブの絵本の内容としては、(一) 口承文芸や古典を元とした絵本(二) 預言者伝などを含むイスラーム関係の絵本(三) イスラームの偉人伝・学者伝など伝記的な絵本(四) 自国の文化にフォーカスした絵本(五) 政治的な絵本(六) 創作絵本(七) 知識の絵本(八) 翻訳絵本などが挙げられる。

特に(二)のイスラーム関する絵本は、アラブのどの国に行っても目にすることができる。きちんとした書店ではもちろん、書店が街中に見当たらない場合でも、モスクの近くには書籍を扱う店があり、そこではこの類の本が売られている。内容はクルアーンからの抜粋、預言者にまつわる逸話、クルアーンに登場する動物の物語などの割合が大きい。またイスラームの教えやモラル、お祈りの仕方などを子どもに教える本や、イスラーム文化を題材とした創作絵本も数多く出版されている。

(三)のイスラーム世界における偉人伝・学者伝の絵本も、(二)に次いでアラブの各国で目にする機会が多い絵本である。マルコ・ポーロに匹敵する大旅行家イブン・バットゥータや「イ

スラーム世界が生み出した最高の知識人」と評されるイブン・スィナー（ラテン名アヴィセンナ）、アルゴリズムの語源となった大数学者アル・フワリーズミー、哲学で名高いイブン・ルシユド（ラテン名アヴェロエス）など、イスラーム世界では様々な出自をもつ数多くの知識人が活躍したが、それらについて「イスラーム世界の学者シリーズ」とでも称すべき絵本が、様々な形で出版されている。

また国によっては（四）の自国の伝統文化に大きく焦点を当てた絵本が目立つ。例えばカタールは住民の約八割を出稼ぎの外国人が占め、母国語であるアラビア語で買い物をするのもままならない。そのためか伝統行事や、かつて湾岸で隆盛を極めた真珠採集を題材とした絵本など、自国の文化をきちんと子どもたちに伝えようとする絵本が多いように見受けられる。

（五）の政治的な絵本については、絵本の始まりにおいてパレスチナ問題が大きく関わったこともあり、このテーマを扱った絵本は今も連綿と出版され続けている。また近年では難民問題を取り上げた絵本も現れている。

サウジアラビアとその絵本の特徴

これらのアラビア語絵本は、広くサウジアラビアに輸入されている。またサウジアラビアで出版された絵本の場合は、特に大きな特色が見られる。その特色とは（一）イスラームに関する比重が特に大きい。（二）イスラームのマナーなど躰に関する絵本が

多い。（三）アブドルアジーズ王の偉業を称える本など、サウジアラビア王国建国に関する絵本がある。（四）後述するワッハーブ主義に則った絵本が少なからず存在することである。この特色について、サウジアラビアのあらましから考えてみたい。

サウジアラビアは石油大国であり、アラブ諸国の中で唯一のG20加盟国である。面積は日本の約六倍で、アラビア半島の大半を占める。国土の三分の一は砂漠で、紅海とアラビア海に挟まれ、火山、高原、オアシスなど、その地勢は多様性に富み、地域によって生活形態も様々である。

サウジアラビア王国の特徴として、非常に宗教色が強いことが挙げられる。男女が同席することはなく、外国人であっても豚肉とアルコールは厳禁、一日五回の礼拝の時間には病院などを別として、商店、レストラン、博物館など全てが閉ざされる。生活の全てがイスラームを中心に回っていると一言しても過言ではない。

また国王の呼称「ハーデム・アル・ハラマイニ・アッ・シャリーフ・ファイン」は「二つの聖モスクの守護者」を意味し、イスラーム最大の聖地マッカとマディーナを擁しているという高いプライドが伺える。国王の権力は非常に強く、祭政一致の原則に則り立法、司法、行政、宗教の全てを国王が司る。元々サウジアラビアとは、「サウード家のアラビア」という意味であり、サウード家出身の国王が国家の富を国民に再分配するレントイア国家である。そのため医療費、教育費などは無料で、付加価値税を別として原則的に税金も存在しない。

建国の歴史は、十八世紀半ばにリヤド近郊の小さな一帯を治めていたサウード家と宗教指導者イブン・アブドル・ワッハブが盟約を結び、ワッハブ主義を掲げて新たな国家体制を作り出したことに始まる。この時よりサウード家は「ワッハブ派の守護者」となり、その運動を広げながら勢力を拡大し、十九世紀の初めにはアラビア半島を統一した。その後オスマン・トルコとの抗争や内紛によって一時弱体化したものの、現在のサウジアラビア王国の建国の祖、アブドルアジーズ王が一九〇二年のマスク岩への奇襲を皮切りとして二十年以上に及ぶ戦いを続け、アラビア半島の諸部族を平定、ついに一九三二年、サウジアラビアの建国を宣言した。その建国の過程において、アブドルアジーズ王も「ワッハブ主義」を掲げ、砂漠の遊牧民ベドウィンに伝道師を派遣しワッハブ運動を広げた。更にベドウィンの農業定着を図って入植地を建設し開拓村を広げたことから、ベドウィンは運動に共鳴する強い絆で結ばれた同胞となった。このようにサウジアラビアでは、三百年前から今日に至るまでワッハブ主義が建国の大きな柱となり、これが国の統治の基礎となっている。

このワッハブ主義は「初期イスラーム時代を模範とし、クルアーンとハディース（預言者ムハンマドの言行録）を忠実に守り、本来のイスラームの姿に帰ろう」とする運動であり、聖者崇拜や、占い、墓参り、願掛けなどの行為を厳しく否定、禁止することでも知られている。

サウジアラビアの教育制度はほぼ日本と同じだが、小学校から大学まで完全に男女別学であり、公立の場合は幼稚園から大学まで授業料は全て無料である。そのカリキュラムの大きな柱は（一）イスラームの教義を基本理念とする宗教教育、（二）イスラーム思想に基づく愛国心教育、（三）建国の偉業を賞賛するサウジアラビア建国歴史教育にあると言える。建国の偉業に対する賞賛は教科書以外にも見られ、例えば建国の端緒を開いたマスク岩は博物館となり、当時の戦いの様子をドラマチックに再現している。また建国のあらましを描いた児童書も出版されている。これらのことからサウジアラビアでは、ワッハブ主義に基づいた宗教教育、およびサウード王家による絶対的な中央集権体制によって、国をまとめようとする姿勢が感じられ、それが絵本にも大きく反映していることが窺える。

このワッハブ主義に則った絵本の大きな特色は、人や動物の姿、特に顔を描かないことが挙げられる。シーア派を別として、イスラームでは姿を描くことは偶像崇拜に繋がることから激しく忌避される。例えば「偉大なるイスラームの正しい導きによる子どもたちの物語」というサブタイトルをもち「[Ashab al-Hi]（象使いの子ども）」という絵本は、登場するゾウやラクダ、鳥など全ての動物が、顔を切り取られた形で表現されている。また『al-Asfuh al-dhakyah wa al-Hi al-tāghiyah（賢い小鳥と乱暴な象）』（Dar al-Qasim, 1996）という絵本では、顔どころか象の姿も小鳥の姿も描かれず、漫画の吹き出しのよう



『象使いの者ども』 [19-]

أصحاب الفيل، جمال الدين عياد،
الدار الوطنية الجديدة،

なものでその存在が示され、動きは足跡で表現されている。このように姿を描かず、透明人間のように足跡や影、履物などでその存在を示したり、顔を隠すか「のつべらぼう」のように描く手法は、他のアラブ諸国でも宗教的な絵本においては見られるが、サウジアラビアの場合は、それが宗教的な絵本のみならず一般的な絵本にも見られる。例えば『Anas wa Ishārah al-murtū (アナスと信号)』(Dar al-Qasim, 2007/2008) は交通ルールを教える絵本だが、主人公アナスの顔は人ではなく地球儀のサウジアラビアの部分として描かれ、表情は口もとだけで表し、目に当たる部分は極力目立たないように黄色の点々で描かれている。またサウジアラビアの教科書では、挿絵の全てが「のつべらぼう」に描かれることもある。

しかし宗教的な保守性は、歴史的には国の近代化を阻害する事態を引き起こした。例えば建国に際し多大な貢献をした同胞団は、後にその狂信的な行為が問題となった。また三代目のファ

イサル王(在位一九六四年～一九七五年)は医療・教育サービスの無償提供、奴隷制度の廃止、女子教育の推進など様々な社会改革を行い、近代化政策を進めたが、これに反対する保守勢力によって暗殺された。一九七九年にはイラン革命に影響を受けたイスラーム過激主義者たちがアル・ハラーム・モスクを占拠し、これを武力で鎮圧する事態となった。これ以降サウジアラビアは、イスラーム過激派に配慮した政策を行う必要に迫られてきた。またサウード家による近代化においては、地域によって自然、風土、部族、生活様式が異なること、また元来が血縁重視の部族社会であり、部族の長たちが未だ大きな力をもっていることも配慮すべき点である。

しかしながら現在のサウジアラビアは、非常に近代的な側面も持っている。首都リヤドは高層ビルが立ち並び、多くの外国人が働く近代都市である。また「ビジョン二〇三〇」を掲げ、二〇一八年には女性の自動車運転を解禁し、二〇一九年からは観光ビザを発給するなど、石油依存からの脱却を目指し一挙に「閉ざされた国」から「開かれた国」へと突き進むようとしているように見える。またサウジアラビアはこの五十年で大きく姿を変えたと言われるが、全人口の五八パーセントを三十歳以下、つまり石油大国となり豊かな生活を享受するようになってから世代が占めており、世代格差が著しい。

そのためか特に近年は、あまり宗教色が濃くなく、世界的に共通する内容をもった絵本が見られるようになってきた。例えば



『彼の頭の上には羽がある』2018

على رأسه ريشة، البتول كمال، علي الزيني،
كادي ورمادي

『Alá ra'shīnī rīshah (彼の頭の上には羽がある)』は、差別と分裂をテーマにした作品であり、ホワイト・レイブンスに選ばれた。ホワイト・レイブンスとは、ドイツのミュンヘン国際児童図書館が毎年選定掲載する国際推薦児童図書目録で、テーマの普遍性、文学性、デザイン性において、世界中の子どもの本の中で特に優れた作品が選ばれることで知られている。またアブドルアジーズ公立図書館は図書館サービスの一環として、アラブの著名な出版社の選りすぐりの児童書を定期的に子どもたちに届け、また児童出版部門ではサウジアラビアの絵本はもちろん、欧米の絵本の翻訳出版もしている。また一般の書店には、サウジアラビアで出版された絵本ばかりでなく、アラブの国々から輸入された様々な絵本や、欧米の翻訳絵本が所狭しと並んでいる。

終わりに

中東の国々は、歴史的にも文化的にも「中東世界、イスラーム世界」として共通の基盤をもち、それが子ども本の世界にも反映している。アラブの絵本は、その発展において国情や政治的な影響を強く受けており、共通語としてのアラビア語は、それらの絵本を広くアラブ圏に流通させている。またサウジアラビアは非常に宗教色が強く、そこで出版される子ども本は、以前には宗教的な内容や躰に関するものが大半を占めるという印象が強かったが、近代化の波を受け近年はその様相が大きく変わりつつある。だが依然としてサウジアラビアが、宗教的な国であることは変わらない。生活に深く結びついた宗教と伝統文化、および地域による多様性と近代化を重視しながら今後サウジアラビアにおいて、どのような子ども本が手渡されていくのか、興味深いところである。

参考文献

- Amāni al-Ashmawī, Hikāyāt sh'abīyah min Mīsr. 2012 Dār Nahdat Mīsr
Muhammad Shādhīf, Hikāyāt qabla al-nawm : qisas. 2003 Mīrīfī
Hī-Nashr wa-al-Ma'īmah
Ya'qūb Shārūnī, Hīlmī Tūnī, 2001 Ajmal al-hikāyāt al-shabīyah.
C.G. Campbell and John Buckland Wright, Folktales from Iraq.

2005. University of Pennsylvania Press

Hikmat Ben Odeh, Classic fairy tales from ancient Palestine and Jordan. 1995. Kanan Press

Ibrahim Muhawi and Sharif Kanaana, Speak, bird, speak again :

Palestinian Arab folktales. 1989. University of California Press

Jean Pickersgill and Hatim Al Tale, Omani Folktales. 2011. AI

Roya Press & Publishing House

Nadia Jameel Taibah and Margaret Read MacDonald, Folktales

from the Arabian Peninsula : Tales of Bahrain, Kuwait, Oman,

Qatar, Saudi Arabia. The United Arab Emirates, and Yemen.

2016. Libraries Unlimited, ABC-CLIO, LLC

Naki Tezel, Türk Masalları. 1990. Kültür Bakanlığı

Salim T. S. Al-Hassani, 1001 Inventions : the enduring legacy of

Muslim civilization. 2012. National Geographic

Tahir Alangu, Keloglan masalları. 1990. Yapı kredi kültür

アリー・アル・ワルディ・上村茂訳『イラク社会の研究』二〇一八

藍ユーフラテス出版

イネア・ブシュナク 編 久保儀明訳『アラブの民話』一九九五

青土社

イブス・ル・ムカッファイ菊池淑子訳『カリラとディムナ…ア

ラビアの寓話』一九七八 平凡社

ギユンセリ・オズギュル再話・絵 ながたまちこ訳『ホジャどんの

しっぺがえし…トルコの民話』一九八三 ほるぷ出版

サウディアアラビア王国文化・情報省編『サウディアアラビア王国・

伝統ある若き近代国家』二〇〇四 サウディアアラビア王国文化・
情報省

ジクリト・フンケ 高尾利数訳『アラビア文化の遺産』二〇〇三
みずぎ書房

デイミトリ・グタス 山本啓二訳『ギリシア思想とアラビア文化・

初期アッバース朝の翻訳運動』二〇〇二 勁草書房

フアフリー・カドゥーリー 上村茂訳『チグリスの岸辺での子供時

代』二〇一六 イラク文化省

ミナ・ジャバアービン再話 ユージン・イエルチン 絵 山口文生

訳『くらやみのゾウ…ベルシャのふるい詩から』二〇一八 評論社

ヤン・クナツパート 編 さくまゆみこ訳『モロッコのむかし話・

愛のカフタンほか』二〇〇五 偕成社

愛甲恵子再話 アリレザ・ゴルドゥズイヤン 絵 『2ひきのジャッ

カル…イランにつたわるおはなし』二〇二二 玉川大学出版部

池田修康君子編訳『アラブのむかし話…レモンの花よめ／ほか』

一九九一 偕成社

伊東俊太郎『十二世紀ルネサンス』二〇〇六 講談社

井本英一編訳『イランのむかし話…マレク・モハンマドの冒険／

ほか』一九九〇 偕成社

上野悌嗣『ほか』『アブドルアジーズ王の生涯…近代サウディアアラ

ビア王国建国の祖』一九九九 日本サウディアアラビア協会

大塚和夫『ほか』編『岩波イスラーム辞典』二〇〇二 岩波書店

岡田恵美子 北原圭一 鈴木珠里編著『イランを知るための65章』

二〇〇四 明石書店

小沢俊夫編 間宮史子訳 森本真実訳『シルクロードの民話』…

アラビア・トルコ』一九九〇 ぎょうせい

小沢俊夫編 鈴木満訳『中近東・アラビア・ペルシア・トルコ・

インド・チベット』一九七七 ぎょうせい

片倉もとこ『イスラームの日常世界』一九九一 岩波書店

川真田純子訳『アラビア物語 1(みどりの文庫)』一九八九 講

談社

塩尻和子『イスラーム文明とは何か…現代科学技術と文化の礎』

二〇二一 明石書店

嶋田襄平編『イスラームの世界』一九八三 日本放送出版協会

菅原陸 太田かおり訳『デ・コルクトの書…アナトリアの英雄

物語集』二〇〇三 平凡社

杉田英明『浴場から見たイスラーム文化』一九九九 山川出版社

鷺見朗子訳『百一夜物語…もうひとつのアラビアンナイト』

二〇一一 河出書房新社

竹原新『イランの口承文芸…現地調査と研究』二〇〇一 溪水社

東京国立博物館「ほか」編集『アラビアの道…サウジアラビア王

國の至宝』二〇一八 東京国立博物館

中村覚 編著『サウジアラビアを知るための65章』二〇〇七 明石

書店

西尾哲夫 責任編集 国立民族学博物館編『アラビアンナイト博物

館』二〇〇四 東方出版

原田安啓『中世イスラームの図書館と西洋…古代の知を回帰させ、

文字と書物の帝国を築き西洋を覚醒させた人々』二〇一五 日

本図書館行会

福田安志『サウジアラビアにおける税制と国家財政…企業への所

得税課税とザカートの賦課』『現代の中東』(三〇) 二〇〇一

日本貿易振興会アジア経済研究所

前嶋信次『イスラームの蔭に』一九七五 河出書房新社

前嶋信次『イスラームの宗教と歴史』一九八七 世界聖典刊行協会

前嶋信次 池田修訳『アラビアン・ナイト』(1~18) 一九六六

一九九二 平凡社

前嶋信次『アラビアン・ナイトの世界』一九九五 平凡社

前嶋信次、杉田英明 編『千夜一夜物語と中東文化 前嶋信次著作

選1』二〇〇〇 平凡社

前嶋信次『イスラームの時代…マホメットから世界帝国へ』二〇〇二

講談社

三浦徹『イスラームの都市世界』一九九七 山川出版社

家島彦一『イブン・バットウータの世界大旅行…14世紀イスラ

ムの時空を生きる』二〇〇三 平凡社

家島彦一『イブン・ジュバイルとイブン・バットウータ…イスラ

ム世界の交通と旅』二〇一三 山川出版社

矢島文夫『アラブ民族とイスラーム文化』一九八一 三省堂

(かたぎり・さおり)